

平成22年5月10日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008 年度～2009 年度

課題番号：20720041

研究課題名 (和文) 戦後イタリア芸術が産業デザインに与えた影響に関する研究

研究課題名 (英文) Influence of Italian modern art to product design

研究代表者

関場 亜利果 (SEKIBA ARIKA)

筑波学院大学 情報コミュニケーション学部 非常勤講師

研究者番号：60458263

研究成果の概要 (和文)：

本研究は美術運動が産業デザインの発展と多様性に寄与した一つの様相を明らかにする事を目的とし、1960 年代にイタリアで発祥した美術運動アルテ・プログラムマータ (Arte Programmata) を研究対象とした。この美術運動は当時先進的な情報科学技術であった「プログラミング」を芸術へ応用することを試み、ブルーノ・ムナリ (Bruno Munari) とウンベルト・エーコ (Umberto Eco) が企画した展覧会がヨーロッパとアメリカ各地を巡回、美術史においてキネティック・アートと位置づけられている。

2008 年度にイタリアとドイツで現地調査を行い、イタリア人作家ブルーノ・ムナリ、エンツォ・マーリ (Enzo Mari)、ジェトゥリオ・アルヴィアーニ (Getulio Alviani)、グループ T (Gruppo T)、グループ N (Gruppo N) について資料収集した。2009 年度はこれら作家がグラフィック・デザインやプロダクト・デザイン的な作品も制作していく点に注目しその背景と要因について考察した。具体的には、この運動がデザイン文化に力を入れるオリヴェッティ社の支援で始まった事、制作過程で工業生産という手段に関わる事、多くの作家が当時急速に産業都市として発展したミラノに関わりがあった事、作品のコンセプトとして「オブジェ」「マルチプル」というキーワードを掲げ、思想的背景として旧来の芸術への批判精神から「共同研究」「共同制作」を行い、従来の芸術と異なる観客との関係を模索していた事、一人の享受者ではなく大衆へ開かれた作品を目指していたこと等である。また、こうした立場を国際舞台で他芸術家や研究者らと交流・議論し再確認した「新しい傾向」への参加が後の制作姿勢に影響を与える過程を調査した。本研究は、他国のキネティック・アートに見られない特徴、デザインへの展開の過程を考察し、美術史的視点のみにとどまらない文化的側面から再考察した点に意義がある。

研究成果の概要 (英文)：

The present study aimed to clarify one aspect where the art movement contributes to development and the diversity of an industrial design; has researched Art movement Arte

Programmata (programmed art) that had been cradled in Italy in the 1960's. This art movement tries to apply "Programming" that is an advanced at that time, information science and technology to the art. The work to which the exhibition that Bruno and Umberto Eco planned is gone round Europe and American various places, and exhibited is located with the kinetic art in art history. Researched in Italy and Germany in 2008, material of Italian artists was collected. In 2009, It was paid attention that these artists produced a graphic design and a product design work, the background and the factor were considered. The present study considers the feature not seen in the kinetic art of another country and the process of development with the design, and there is a meaning in the point to have done the reconsideration guess from a cultural side in which it did not stay only in an art history aspect.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：デザイン史，イタリア美術，モダン・デザイン，イタリアン・デザイン，メディア・アート，キネティック・アート，アルテ・プログラマータ，グループT，グループN，ブルーノ・ムナリ，エンツォ・マーリ

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで戦後イタリア美術の研究を行ってきた。特にキネティック・アート分野について、イタリアの「グループT」(Milano, 1959～)の活動を中心に調査してきた。グループTは国際的に知られたキネティック・アートの作家であると同時に戦後日本美術とも直接関わった点が興味深い。また彼らが探求した時間美術は近年の美術にお

いてインタラクティブ・アートが興隆し身体性再評価の機運が高まる中、これら表現のルーツに当たる点が重要である。この研究を続ける中、戦後イタリアにおいて美術運動が産業デザインの発展・多様性に関わった点に興味をもち、現代イタリアン・デザインの特徴はアートとデザインの密接な関係にあると考えるようになった。それを具体的に表しているのが、グループTが参加した芸術運動「ア

ルテ・プログラマータ」である。これはオリヴェッティ社の支援によりブルーノ・ムナリーとウンベルト・エーコが企画したものである。当時の先進的な科学技術や哲学を芸術に応用しようとした試みであり、参加した多くの芸術家が後に著名なデザイナーとして活躍した点に注目した。

2. 研究の目的

本研究は1960年代にイタリアで発祥した美術運動アルテ・プログラマータ (Arte Programmata) を研究対象とし、第二次世界大戦後のイタリアにおいて美術運動が産業デザインの発展と多様性に寄与した一つの様相を明らかにする事を目的とした。

予備調査により、アルテ・プログラマータの作家の多くが後にデザイナーとしても活躍したことが分かっている。現在イタリアでは「arte programmata e cinetica プログラムされた動的な芸術」という呼称が使用されるようになってきており、これは国際的にキネティック・アートと呼ばれた動向が、イタリアでは「プログラム」というキーワードにより展開し、情報科学を応用した造形探求であったことが分かる。それは結果的に、他国のキネティック・アートに見られない特徴を見せる。これらを詳細に明らかにしていく過程で、この運動の特徴を美術史的視点のみにとどまらない文化的側面から再考察する。

3. 研究の方法

先行研究の問題として、キネティック・アートという「美術」の側面からしかアルテ・プログラマータ運動が捉えられていない点がある。この点を解決するために本研究では、まず出展作品の製作技術・表現内容について、アートとデザインの共通項・相違点に着

目した特徴抽出を試みる。次にこの運動に参加した作家のその他の作品（デザインの仕事を含める）を調査し比較する。

4. 研究成果

イタリア人作家ブルーノ・ムナリー、エンツォ・マーリ (Enzo Mari)、ジェトゥリオ・アルヴィアーニ (Getulio Alviani)、グループ T (Gruppo T)、グループ N (Gruppo N) について、特にグラフィックやプロダクト・デザイン的な制作をしていく点に注目しその要因を考察した。具体的に、この運動がデザイン文化に力を入れるオリヴェッティ社の支援で始まった事、工業生産という手段に関わる事、多くの作家が産業都市ミラノと関わった事、コンセプトに「オブジェ」「マルチプル」を掲げ、旧芸術への批判精神から「共同研究・制作」を模索し、従来の芸術と異なる観客との関係を成立させようとした事、一人の享受者ではなく大衆に開かれた作品を目指していた事等である。またこうした立場を国際舞台で他の芸術家や研究者と議論した「新しい傾向」への参加が後の制作姿勢に影響を与える過程を調査した。これらをもとに2009年にデザイン史学研究会・第17回研究発表大会で口頭発表を行い、また論文は日本デザイン学会研究論文集「デザイン学研究・第56巻第3号」に掲載された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 関場亜利果, グループTによるミリオラマ15 — イタリアにおけるキネテ

イック・アートの動向, デザイン学研究, 査読有, 第56巻第3号, 2009年, pp. 1~10.

[学会発表] (計 1 件)

- ① 関場亜利果, グルッポTによるミリオラマ15 — イタリアにおけるキネティック・アートの動向, デザイン史学研究会・第17回研究発表大会, 口頭発表, デジタルハリウッド大学, 2009年.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関場 亜利果 (SEKIBA ARIKA)

筑波学院大学・情報コミュニケーション学部・非常勤講師

研究者番号 : 60458263